活動報告

第16回 因幡の手づくりまつり

― 鳥取短期大学の取組みを中心に ―

國本　真吾（Shingo KUNIMOTO）　・　板倉　一枝（Kazue ITAKURA）

はじめに

子どもたちにものづくりの文化や楽しさを伝えて行こうと、1997（平成９）年から開始された「因幡の手づくりまつり」も、2012（平成24）年で16回目を迎えた。本学が大きく関わるようになった第８回（2004年）から数えて９回目、ついにその歴史の半数以上の年月が経過した[1)]。本報告では、「第16回　因幡の手づくりまつり」における本学の取組みを中心に、活動記録として記す。

１．実行委員会

「第16回　因幡の手づくりまつり」に向けた動きは、前年の2011（平成23）年11月から開始された。実行委員は、鳥取大学・鳥取短期大学・鳥取環境大学の鳥取県下３大学の教員・学生、智頭街道商店街振興組合の理事など計26名で構成され、本学からは國本・板倉の２名が参加した（本学のみ、学生実行委員の参加はなし）。会議は、開催地である智頭街道商店街（鳥取市）に位置する「五臓圓ビル」で行われ、基本は19時から21時の枠で設定された。全体の実行委員長として土井康作氏（鳥取大学地域学部地域教育学科教授）が、学生実行委員長として中松輝喜氏（鳥取大学地域学部地域教育学科４年生）が務めた。以下に、実行委員会の開催状況と主な議題内容を示す。

表１　第16回　因幡の手づくりまつり実行委員会　開催状況

回	開催日	主な議題内容
第１回	2011/11/22	実行委員顔合わせ、第16回に向けたフリーディスカッション　等
第２回	2011/12/13	企画検討、地域連携の内容に関する議論　等
第３回	2012/1/10	日程決定、ワークショップの開催検討、広報について　等
第４回	2012/2/16	全体スケジュール、予算、地域連携、後援手続きについて　等
第５回	2012/3/5	商店街巡りの反省、チラシ検討　等
第６回	2012/3/30	予算・企画内容の検討、学生の動き、広報計画　等
第７回	2012/4/13	会場配置、出展ブースの確認、学生の動き　等
第８回	2012/4/26	第１回全体会反省、出展ブースの確認、広報計画、寄付活動　等
第９回	2012/5/15	広報、会場配置、前日・当日スケジュールの検討　等
第10回	2012/5/22	最終広報活動、前日・当日スケジュールの確認　等
第11回	2012/6/4	当日の反省、写真展開催について、今後について　等

上記の実行委員会の他、第１回と第２回実行委員会の間に、機関代表による事前協議（2011年12月５日）が持たれ、その後の議論のための叩き台が検討された（本学の機関代表として國本が出席）。

実行委員会での議題は、第１回～第６回までの間が企画内容に関するものが中心的であり、因幡の手づくりまつり当日の進め方に関わる動きの協議は、各大学での動きが実施される４月以降で本格化

する。実行委員会での役割として、本学は毎回の議事を作成して配布する役を基本的に板倉が務めた。また、後援依頼手続、広報計画の作成と実施、前日・当日スケジュールの作成、当日備品（机・イス）の配置計画などを、國本が中心に担った。

2．広報活動

「因幡の手づくりまつり」の広報活動は、例年チラシ・ポスターの作成・配布、web 上における情報発信、テレビ出演・新聞取材の依頼・実施が中心的な内容である。広報に関連する動きとして、後援先（行政・団体・学会）への依頼、寄付依頼等も加わる。これらの作業の大半を、國本が中心となって実施した。

図１　ポスター・チラシデザイン

（1）チラシ・ポスター

「第 16 回　因幡の手づくりまつり」のポスター・チラシは、同一デザインで作成された（図１）。原画デザインは鳥取大学の学生委員が行い、株式会社パレット（鳥取画材）で文字情報を落とし込んで仕上げた。チラシはＡ４サイズで 25,000 枚印刷（印刷は鳥取おやこ劇場へ依頼）し、鳥取市内の保育所・幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校・公民館・図書館等 144 箇所に配布・郵送した。鳥取市内の保育所・小学校・中学校・公民館等への配布に際しては、鳥取市役所及び鳥取市教育委員会の文書箱への投函を 2012 年５月８日に実施した。その際、國本及び鳥取大学の学生委員は、鳥取市役所の駐車場で竹内功鳥取市長に声を掛けられ、市長へのチラシの手渡しを行うとともに広報活動の状況を伝えたことで、市役所の関係課から智頭街道商店街振興組合に問合せがあった。

（2）報道各社へのプレスリリースと取材

報道機関への取材・イベント告知掲載の依頼は、鳥取市企画推進部広報室を通じて市役所記者クラブへ配信した。報道各社の対応状況は、以下の通りである。

［新聞］朝日新聞イベント案内掲載（5/25）、朝日新聞記事掲載・日本海新聞イベント案内掲載（5/26）、毎日新聞記事掲載（5/28）、日本海新聞記事掲載（5/29）、しんぶん赤旗記事掲載（5/30）

［テレビ］いなばぴょんぴょんネット「とっとりウォーキング」放送（6/3・4）、日本海テレビ「ニュース every 日本海」放送（6/7）

（3）web 上における情報発信

「因幡の手づくりまつり」の web 上における情報発信は、公式ホームページ（http://www.geocities.jp/tedukuri_project）において、開催概要や当日の参加方法等を掲載した。前回までは、モバイル版のページも作成したが、スマートフォン等の拡大も踏まえて廃止し、代わりに SNS メディアとしての facebook ページを新たに設けた（http://www.facebook.com/inabatedukuri）。これらのページ作成・情報更新を、國本が担った。また、学生実行委員によるブログ（http://ameblo.jp/tedukurimaturi/）・

twitter（http://twitter.com/tedukuri2012/）による発信も実施した。

（4）新たな試みとしての「サポーター」募集

事業資金の一部として、例年は有志からの寄付を募ることを行ってきた。これまでは1口 1,000円の拠出に対し、当日の参加券（前売りチケットの役割）を引き換えに実施してきたが、今回は新たに「サポーター寄付」の形で、その方法を改めることにした。

第8回実行委員会において、寄付の実施をめぐり議論が行われた際、当日用意する「手引書」への広告掲載やスタッフTシャツへのスポンサー広告などの案が浮上した。しかし、いずれも実行委員の賛同を得ることなく、結論が見出せなかった中、國本の発案で「サポーター寄付」という形で、前売りチケットの役割だった当日券引換を廃止し、代わりに「因幡の手づくりまつり」の広報を兼ねたステッカーとの交換という案が承認された。1口当たりの寄付金額は従来と同じ設定にし、気軽に寄付が行えるとともに、例えば店舗の店先にステッカーを貼りつけることで広報の一端を担っていただこうというねらいでの発案であった。ステッカーは100枚作成し、目標額は100,000円に設定して集めることとした。結果、80の個人・団体から138口の寄付をいただくことができ、そのねらいは十分に達成することとなった。なお、寄付をいただいた方々については、「第16回　因幡の手づくりまつり」当日及び事後開催の写真展（7月3日～16日、於：五臓圓ビル2階ギャラリー）において、パネルで感謝の意味として公表した。

第16回 因幡の手づくりまつり

サポーター寄付募集 5月27日(日) 1口¥1,000

子どもたちに"ものづくり"の大切さを一という思いから始まった「因幡の手づくりまつり」も、今年で16回目をむかえます。2008年から試みてきた鳥取市内の智頭街道商店街を会場とした開催も定着し、この地では春月の風物詩として認識されるようになりました。しかし、発展すればするだけ、財政的にも多くの負担がかかり、ボランティアの気持ちだけでは賄いきれなくなってきております。そこで2つのお願いをさせていただきます。

一つ目は、5月27日の手づくりまつり当日に、多くの方々にご参加をいただきたいということです。

二つ目は、私たちの趣旨にご賛同いただける方に、一口1,000円で手づくりまつりサポーターになっていただき、財政的に支えて頂きたく存じます。サポーター寄付を頂いた方には、手づくりまつりサポーターステッカーを進呈しますので、手づくりまつりのPRにご協力・ご活用いただきたく存じます。

因幡の手づくりまつり実行委員会 一同

第16回 因幡の手づくりまつり 2012年5月27日(日) 10:00～15:00
智頭街道商店街にて(雨天決行)　材料費：500円(2～3個作れます)
問合先：智頭街道商店街振興組合 TEL0857-21-7995(武田)、090-3179-4743(帯村)

きりとりせん

第16回 因幡の手づくりまつり サポーター寄付(＿＿口、＿＿＿＿円)を行います。

お名前	
ご住所	〒
お電話	
寄付公開	お名前の公開について　可 ・ 不可　(いずれかに○を)

※ご寄付をいただいた方のお名前を、手づくりまつり本部での掲示及び冊子に掲載させていただく予定です。

受領日	5月　日	受領者氏名	

図2　サポーター寄付募集チラシ

3．地域との関わり

「因幡の手づくりまつり」を智頭街道商店街で開催することになった第11回（2007年）より[2)]、智頭街道商店街がある遷喬地区の自治会・住民・小学校等との連携を常に模索してきた。遷喬小学校とは、総合的な学習の時間において、鳥取大学地域学部地域教育学科の専門科目「生活・総合学習の基礎」との連携が重ねられてきた背景もあり、今回も鳥取大学の学生が小学校の児童とともに手づくりまつりへの出展という形で活動が受け入れられた。それに加え、子どもだけではなく、地域住民との連携についても強化していこうと、実行委員会の前半で議論が重ねられ、地域住民向けの説明会を企画することとなった。

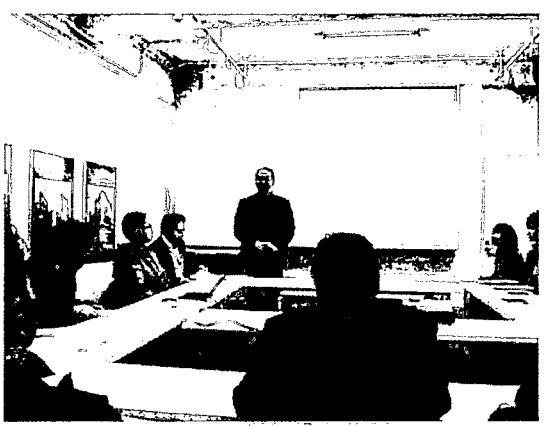

写真1　にぎわいを考える集い

地域住民向けの説明会の案内とあわせて、学生委員が商店街や地域を知り、そして地域の様子をつ

かむ目的から、２月下旬より商店街・地域巡りを実施した。実行委員がこれまで把握できていなかった、商店の特色や出展の可能性をつかむことができた反面、「因幡の手づくりまつり」に対する地域理解の実態が見えた活動にもなった。それを踏まえて、３月 12 日に「第 16 回　因幡の手づくりまつりによる遷喬地区のにぎわいを考える集い」と題された会を行い、遷喬地区住民や智頭街道商店街や近隣商店の店主など、計 24 名の参加者があった。これに加えて、５月８日にも出展参加する商店街店主を対象とした説明会を試みたが、参加者数が少ないこともあり直前に取りやめた。

地域住民との連携強化が今回の大きな目標ではあったが、遷喬地区が鳥取市役所本庁舎に隣接しており、鳥取市役所の新築移転か耐震改修かを巡る住民投票が、手づくりまつりの１週間前に控えていたことから[3]、実行委員会が思うような形を実現することは容易では無かった。とは言え、遷喬小学校児童の出展以外にも、スタッフや参加者の昼食を担う近隣の飲食店の協賛営業が実現し[4]、また一歩連携のコマを進めたところは大きかった。

４．学生スタッフの動き～鳥取短期大学を中心に～

（1）学生「スタッフ」の募集

本学における学生スタッフの募集と組織化は、例年４月に入ってから実施している。鳥取大学・鳥取環境大学は、４年制大学であるために、前年度からの学生の組織化が可能ではあるが、２年生の短期大学である本学としては、前年度にスタッフとして集めることが出来る学生は新２年生であり、また全学生の半数しかターゲットとして狙えないため、スタッフ募集の活動は、新入生を迎えた４月に行っている。

図３　本学学生スタッフ募集ポスター

学生スタッフの募集には、ポスター（図３）を学内に掲示するとともに、地域交流センター兼担研究員の協力を得て、各学科・専攻で同様のチラシを配布する。チラシには細かな説明は省き、興味がある学生には、まず学内説明会に出席して参加を決めるようにしている。今回は、４月 16 日に学内説明会を実施した。学内説明会では、手づくりまつりの趣旨や概要、学生スタッフとしての役割やスケジュールなどを示した上で、学生スタッフとして登録する意思が固まった者に、スタッフ登録用紙への記入・提出を求めた。この説明会では 30 名を超える学生の出席があり、説明会終了時点で 20 名の登録があった。その後も登録希望者が出てきたため、最終的には 33 名の学生が、本学からの学生スタッフとして参加することとなった。

本学でスタッフ登録した学生は、実行委員である教員が携帯電話のメールアドレスを把握し、実行委員会本部からの諸連絡や本学内でのやりとりを教員との間で行った。鳥取大学・鳥取環境大学では、学生への連絡はすべて学生実行委員が実施しているが、本学は教員実行委員が間に入る形で諸連絡を伝達していくことにしている。本部からの情報をすべて配信する形だと、本学学生が混乱することも多いため、教員実行委員がチューター的に関与することで、必要な情報を的確に伝達して行く手法を採っている。

ちなみに、本学では学生「スタッフ」と称して、あえて「ボランティア」という表現は行っていない。鳥取大学・鳥取環境大学では「ボランティア」の名称で、学生を募集する形になっているが、「ボランティア」はあくまで行動する人の精神的なものであると捉え、本学ではこの間一貫して「スタッフ」という名称を使用している。また、本学としては教育活動として教員が責任をもって対応すると

いう趣旨や、学生スタッフ自体も手づくりまつりを作り上げる主体として位置づける意味でも、「スタッフ」という名称にこだわっている。地域交流センターのコンセプトの一つである「教育」は、ここで具現化されていると言っても過言ではない。

（2）全体会への参加

「因幡の手づくりまつり」では、「全体会」を基本的に２回実施する。１回目は担当する出展ブースの決定、２回目は開催直前での決起集会の意味合いである。

第１回全体会は、４月 21 日に鳥取大学広報センターで行われた。本学は出席する学生用のバスを運行し、移動手段の保障を行った。出席した学生は、この場で自らが担当する出展ブースを決定する。出展ブースには、①商店街・職人・地域ブース、②各大学ブース、③授業ブース（鳥取大学）、④その他（ものづくりカフェ・遷喬小学校・協賛企画・受付等）の種類があり、計 46 ブースが今回設定された。本学の学生は、この中の①及び本学生活学科食物栄養専攻が出展する②、そして④の受付から、自分が携わるブースを他大学の学生とともに決めて行った。①②④では、他大学の学生と一緒に取り組むものもあり、商店街・地域・学生間での交流が創出されることにもなっている。

担当するブースが決定した後、ブースの講師役となる商店街店主や職人などと連絡をとり、ものづくり製作の指導を受けた上で、事前練習と準備を約１ヶ月間実施する。この期間設定は、スタッフである学生自身が試作を通じて「ものづくり」を自ら体験し、当日の参加者にどのような声掛けや指導上の注意を想定したらよいかをイメージし、よりよい指導法を開発していくために設けられている。

途中、各ブースのチーフ学生だけを招集した「チーフ会」が５月６日に行われ、作業の進捗状況や当日必要な看板の作成、必要となる材料の発注などを行った。

第２回全体会は、当日の１週間前となる５月 20 日に鳥取大学大学院工学研究科大講義室で行われ、手づくりまつりに関わる全スタッフが招集された。ここでは、当日の運営上の諸注意が実行委員から示され、スタッフ間での共通認識を図った。また、各ブースで試作した作品を披露し、全スタッフが手づくりまつりで行われる「ものづくり」体験の全容を知ることも行われている。中には、試作時の苦労話や、「ものづくり」を行う上で開発した工夫点を披露することもあった。

写真２　第２回全体会の様子

５．当日について

（1）前日準備

「第 16 回　因幡の手づくりまつり」は、５月 27 日（日）に実施された。前日の５月 26 日には、前日準備として会場への物品搬入と設営作業が実施されたが、その作業は鳥取大学・鳥取環境大学の学生に担ってもらう形になった。本学は会場から離れていることもあり、前日準備に本学の学生スタッフは参加することが容易ではなく、特に幼児教育保育学科の学生スタッフは土曜日に補講が実施されるため、授業優先と判断して前日準備の一斉参加を求めていない。但し、幼児教育保育学科以外の学生で、鳥取市内在住かつ会場までの交通手段が確保できる場合は、なるべく参加するようにした。

前日準備では、各ブースで用意した材料や道具を、鳥取大学からトラックで輸送し、会場近くの鳥取商工会議所ビル「鳥取産業会館」へ搬入した。当日使用する机・イスを、遷喬小学校・若桜街道商店街・智頭街道商店街から借用し、保管場所へ移動させた（机 109・イス 208 を借用）。また、電力を

必要とするブース用の電源確保の作業も行われ、すべての作業をチーム編成により実施した。

これらの準備作業のため、各大学から約100名の学生・教員が、会場となる智頭街道商店街に集結し、1時間半ほどでその作業を行った。普段は人気も疎らな商店街に、この数の人が準備のために行き来をするのであるから、手づくりまつりを知っている近隣住民であっても、その光景に驚くようである。

（2）当日の様子

今回設定された「ものづくり」体験のためのブースは、計46ブースである。約300mの商店街区間に、この数のブースが置かれたことになる。これらと合わせて、協賛企画ブース、受付に各大学の学生スタッフを配置した（表2）。学生スタッフの内訳は、鳥取大学が120名、鳥取環境大学が44名、そして本学が33名である（いずれも学生実行委員を含む）。教員・商店街店主・職人等を含めると、全体で298名の総スタッフ数になった。

本学が関与したブースは、生活学科食物栄養専攻による「焼きドーナツ・揚げぎょうざ」以外に、商店街4ブース、芸術家・職人1ブース、短大独自3ブース、鳥大1ブース、受付3箇所である。なお、生活学科食物栄養専攻のブースは、松島文子教授（地域交流センター長併任）・下地葵助手が指導者役の講師として参加した。学生スタッフの内訳は、国際文化交流学科3名、生活学科食物栄養専攻19名、幼児教育保育学科11名である。当日はJR倉吉駅出発で、本学スクールバスを移動用の交通手段として運行した。

今回は天候にも恵まれ、過去の大会で経験した雨で参加者が移動しにくいということもなく、スムーズに進行した。午前10時の開幕とともに、わらべ館（財団法人鳥取童謡・おもちゃ館）のスタッフによる演奏パレードが華を添えた。当日の参加者数は約1,300名と推計され、ほぼ例年通りの賑わいがあった。参加者の姿は、子ども連れの家族や、子どものみ・大人のみでの参加などで、午後3時の閉幕まで、時間一杯楽しむ姿が見られた。約300mの商店街の区間は、歩行者天国を実施せずにアーケードを中心にブースが一定間隔で配置され、大きな交通障害もなく人の往来が確保できた。また、協賛企画であるミニ蒸気機関車乗車体験（アコヤ楽器店）は、旧袋川上の「きなんせ広場」を会場として、広場いっぱいにレールが敷かれ、手づくりまつり参加者ではなくても注目する形となった。

表2　各ブースと学生スタッフ配置

	コーナー	所属	学生スタッフ配置
1	プロが仕上げるワイシャツ仕上げ体験	商店	鳥大3名
2	ちょっといっぷく“お抹茶をたててみませんか”	商店	鳥大3名、環境大2名
3	へんしん！お面づくり	商店	鳥大3名、短大1名
4	蒔絵体験	商店	鳥大3名、短大2名
5	カードケースづくり	商店	鳥大3名、環境大2名
6	キャンドルづくり	商店	鳥大2名、短大2名
7	簡単な小皿づくり	商店	鳥大3名
8	竹輪づくり体験	商店	鳥大2名、環境大2名
9	楽しい手芸	商店	鳥大4名
10	「飛び出すカード」をつくってみよう！	商店	鳥大2名、短大1名
11	和スイーツ“きんとん”	商店	鳥大4名
12	マーブリングで字てがみ	商店	鳥大4名
13	旗染め	商店	鳥大4名
14	和紙でつくるうちわ	芸術家・職人	学生配置なし
15	発射台付きブーメラン・リボン型マラカス	芸術家・職人	短大3名
16	手づくり笛	芸術家・職人	鳥大3名
17	チョウのストラップ・ブローチ	芸術家・職人	鳥大4名
18	クルクル風車	芸術家・職人	学生配置なし
19	ソーラートイ	芸術家・職人	鳥大3名
20	LEDガラスパネル電飾	芸術家・職人	鳥大3名
21	竹笛	ものづくりカフェ	学生配置なし
22	木のものさしづくり	ものづくりカフェ	学生配置なし
23	紙のペンダント	ものづくりカフェ	学生配置なし
24	グラスアート	遷喬地区公民館	鳥大3名
25	焼きドーナツ・揚げぎょうざ	鳥取短大	短大9名
26	マジックスクリーン	鳥取短大	短大4名
27	カラフルスーパーボール	鳥取短大	短大4名
28	きらきら万華鏡	環境大	環境大5名
29	わ！ふーミニ障子	環境大	環境大5名
30	いす型の花台	環境大	環境大5名
31	あきかんふうりん	環境大	環境大5名
32	おきあがりこぼし	環境大	環境大5名
33	カラフルビー玉おとし	環境大	環境大5名
34	シュート棒	鳥大	鳥大3名、附属支援10名
35	プラバンキーホルダー	鳥大	鳥大3名、短大1名、他2名
36	スイスイすすむ船	鳥大	鳥大2名、小学校1名
37	光る泥だんご	鳥大	鳥大6名
38	アニマルウォーク	遷喬小学校	鳥大4名、小学校27名
39	スーパーマン	遷喬小学校	
40	背伸び貯金箱	鳥大授業	鳥大5名
41	木の実動物園	鳥大授業	鳥大6名
42	ビックリ箱	鳥大授業	鳥大5名
43	ゾートローブ・ぶんぶんゴマ	鳥大授業	鳥大5名
44	段ボール迷路	鳥大授業	鳥大6名
45	手づくりタイコ	鳥大授業	鳥大5名
46	キューブパズル	鳥大授業	鳥大5名
協賛	蒸気機関車	商店	環境大2名
協賛	カレー	商店	学生配置なし
実委	本部		実行委員学生
実委	受付（本部受付・鳥取銀行前）		短大2名、環境大2名
実委	受付（入口支部・商店街事務所前）		短大2名、環境大1名
実委	受付（五嶽園支部・五嶽園ビル前）		短大2名、環境大1名

時間中、日本海テレビジョン放送の取材が行われ、商店街ブースで蒔絵体験を出展した會州堂の店

主を採り上げたローカルニュース特集が、当日の模様と合わせて後日山陰両県に向けて放送された。

以下の写真は、本学の学生が関わったブースの一部の様子である。本学は、後日大学ホームページ（http://www.cygnus.ac.jp）において、大学全体の新着情報、各学科・専攻の新着情報の形で紹介した（pp.26～27の資料参照）。

写真３　蒔絵体験

写真４　カラフルスーパーボール

写真５　キャンドルづくり

写真６　受付（五臓圓支部）

おわりに～まとめに代えて～

「因幡の手づくりまつり」は鳥取県下３大学協働での取組みであるとともに、本学においては地域交流センターが関与する事業としても進めてきた。会場が鳥取市内であると言っても、本学在学生の38%は鳥取県東部の出身者である（2012 年度）。その大半が鳥取市の出身者であることからも、鳥取県東部における本学の活動は、非常に重要な意味を持つ。しかし、手づくりまつりの本学学生スタッフのほとんどは鳥取県東部地域外出身の学生であり、出身地域での地域活動に当該地域出身学生が少ないことは、手づくりまつりに限らず、本学の他の地域活動においても共通している課題である。今後は、そのような課題にも着目し、学生の地域活動への参画をどのように進めていくかを検討していきたい。

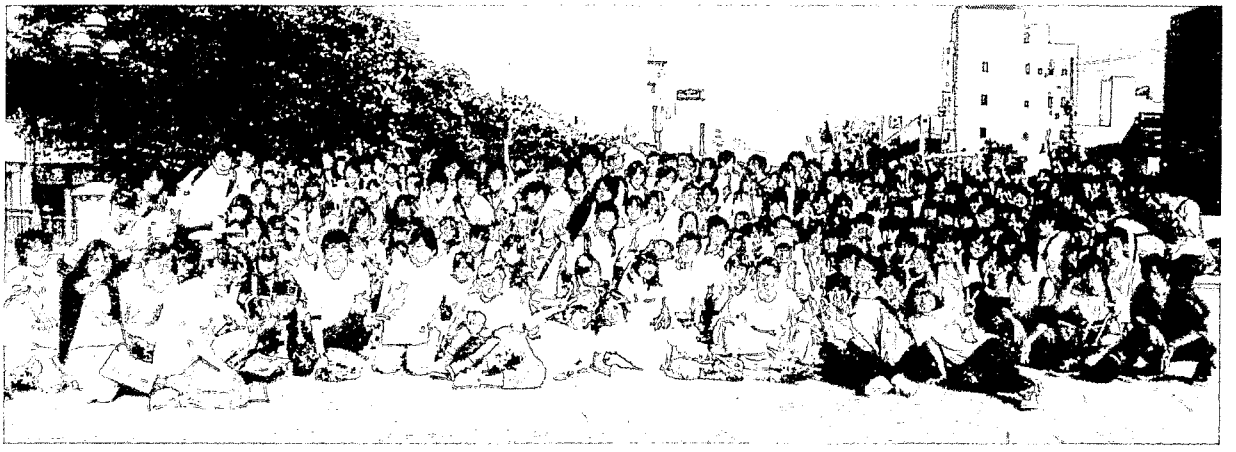

写真７　当日終了後の全学生スタッフ記念写真

≪注≫

1）本学が「因幡の手づくりまつり」に関わって以来、本学関係者が著してきた論文・研究ノート等は以下のものである。

・國本真吾・板倉一枝・塩野谷斉・土井康作（2006）「地域活動を通した学生の主体形成に関する研究ー『第８回伯耆の手づくりまつり』アンケートからー」『鳥取短期大学研究紀要』第54号

・國本真吾（2007）「『因幡の手づくりまつり』における発達の視点ー現代の子ども・大学生の教育と地域づくりー」『鳥取短期大学研究紀要』第56号

・杉本真由実・板倉一枝・國本真吾（2008）「学生の地域活動への参加意欲に関する考察ー『第11回因幡の手づくりまつり』アンケートからー」『鳥取短期大学研究紀要』第57号

・杉本真由実・板倉一枝・國本真吾（2009）「学生の地域活動を支える学内コーディネーションー『因幡の手づくりまつり』を事例としてー」『鳥取短期大学研究紀要』第60号

・杉本真由実・小林陽子（2010）「因幡の手づくりまつりを通してー家庭科製作学習の指導力を高める試みー」日本家庭科教育学会中国地区会編『いきいき家庭科』教育図書

・國本真吾（2011）「“ものづくり”ー“ひとづくり”ー“まちづくり”の統一視点ー『地域学』の実践として『因幡の手づくりまつり』をどのように見るかー」『鳥取短期大学地域交流センター　平成22（2010）年度研究報告書　大学と地域の関係性（1）～鳥取短期大学の地域に対するミッション～』

2）ただし、第11回当日は天候不良のため、急遽会場を鳥取県立県民文化会館へ移動して実施。智頭街道商店街で実施できたのは、実質的には第12回（2008年）からである。

3）住民投票は、「第16回　因幡の手づくりまつり」当日の１週間前にあたる５月20日に行われた。なお、住民投票をめぐる動きの総括としては、市庁舎新築移転を問う市民の会（2012）『「市民の会」400日の戦いー鳥取市庁舎をめぐる住民投票運動の記録ー』に詳しくまとめられている。

4）今回は公的な補助金の獲得を行わないという方針で、事業費を圧縮するために、スタッフの昼食としての弁当支給を取りやめた。その代替策として、商店街や近隣の商店で飲食店を営んでいる店舗との連携を検討した。最終的には協賛企画として、手づくりまつり当日に協力して営業していただける飲食店を手上げ方式で募り、スタッフや参加者へ利用を促した。

［謝辞］鳥取大学・鳥取環境大学・智頭街道商店街振興組合の「第16回　因幡の手づくりまつり」各実行委員や関係者をはじめ、当日ご参加いただいた本学教職員、サポーター寄付をいただいた本学教職員、そして学生スタッフとして関わった本学学生諸君に、記して感謝いたします。

資料　本学ホームページ新着情報記事より

大学からのお知らせ（2012年6月5日）

「第16回　因幡の手づくりまつり」に参加しました

5月27日（日）、鳥取市の智頭街道商店街で開催された「第16回　因幡の手づくりまつり」（主催：同実行委員会、共催：本学など）に、今年も本学から参加しました。

今回は、国際文化交流学科、生活学科食物栄養専攻、幼児教育保育学科から計33名の学生がスタッフとして関わりました（詳細は各学科新着情報を参照してください）。学生スタッフとしての役割は、子どもに対するものづくり指導の講座を担当するもの、受付・警備などの大会運営を支えるものなど、鳥取大学や鳥取環境大学の学生スタッフとともに努めました。

4月に学内で実施した説明会から約1か月にわたり、準備期間としてそれぞれがこの日に向けて用意を重ねてきました。特に、子どもに対してものづくり指導を行う講座を担当した学生たちは、他大学の学生とともに講座を担当することもあるため、学内はもとより商店街や他大学を訪れて、時間をかけて準備にあたってきました。また、本学からは生活学科食物栄養専攻の松島文子教授・下地葵助手が講師となり、「焼きドーナツ・揚げぎょうざ」の講座を同専攻の学生有志が指導役を担いました。

このイベントは、さまざまな手づくり体験講座を通じて、子どもたちにものづくりの楽しさや大切さを伝えようと、毎年鳥取市内で開催されています。本学は、鳥取大学・鳥取環境大学、そして会場となる智頭街道商店街と協働し、約半年間にわたり企画を検討してきました。当日は約1300人の来場者があり、時間の許す限りものづくりに熱中する子どもの姿が見られました。

実行委員を務めた本学幼児教育保育学科の國本真吾准教授は、「学生スタッフだけでも200名という規模の中、本学の学生スタッフたちは他大学の学生たちとともに汗を流した。毎年、この手づくりまつりに参加した学生は、卒業後も強く思い出として残っている。一つの大きなイベントを作り上げることを通じて、普段の授業とは違う学びや成長があるのだろう」と総括しました。

http://www.cygnus.ac.jp/notice/news/20120605001209.html

国際文化交流学科お知らせ（2012年6月6日）

"ものづくり"を通して多くの人と交流！～因幡の手づくりまつりに参加しました～

5月27日（日）、鳥取市の智頭街道商店街界隈において、第16回因幡の手づくりまつりが開催されました。このイベントは、子どもたちにものづくりの楽しさを体験してもらおうと毎年この時期に行われ、運営には鳥取短期大学、鳥取大学、鳥取環境大学の学生約200名がスタッフとして関わっています。国際文化交流学科からも1年生の有志が「発射台つきブーメラン＋リボン型マラカス」と「カラフルスーパーボール」のブース担当として参加しました。

参加学生からは、「子どもたちにものづくりを教えるために、事前に学んだり準備したりすることが多く大変でしたが、当日子どもたちが楽しそうに作ったり遊んだりしているのを見ると嬉しい気持ちでいっぱいになりました。」「子どもや保護者の方、他大学の学生、他学科の先輩など、多くの方と交流することができました。ものづくりを通していろんな人と出会えたことが自分のいい経験になったと思います。」といった満足感あふれる感想がきかれました。

この学科では、「交流力」を身につけることをめざしていますが、授業以外でも学生たちはこうした地域のイベントへ参加し、積極的に交流を実践しています。

http://www.cygnus.ac.jp/subject/inter/news/20120606001212.html

生活学科食物栄養専攻お知らせ（2012年６月４日）

「因幡の手づくりまつり」に参加しました！

5月27日（日）鳥取市智頭街道商店街にて第16回因幡の手づくりまつりが開催されました。このイベントは、子どもたちにものづくりの楽しさや大切さを体験してもらう目的で開催されており、食物栄養専攻からは「焼きドーナツ・揚げぎょうざ」のブースを出展しました。食物栄養専攻の1、2年生が学生ボランティアとして参加し、子どもたちと一緒におやつづくりをしました。

焼きドーナツブースでは、子どもたちが2種類のドーナツにアイシングやチョコレートソース、カラースプレー、アーモンドなどで好みのトッピングをし、オリジナルドーナツが完成しました。一方、揚げぎょうざブースでは、学生から具材の包み方を教わりました。初めはぎこちない様子だった学生たちも徐々に慣れ、子どもたちと触れ合いながら上手に焼きドーナツや揚げぎょうざづくりをサポートしていました。

また、今年は智頭街道商店街や鳥取大学から出展されたブースにも、食物栄養専攻の学生がボランティアとして参加しました。約1カ月の準備期間で講師の先生方からコツを教わり、「カラフルスーパーボール」や「蒔絵体験」などのブースで子どもたちに手ほどきしました。

手づくりまつりに参加した学生たちは、「子どもたちに分かりやすく教えるのが難しかったですが、楽しく子どもたちと接することができました」「来年もまた参加したいです」などの感想が聞かれました。

http://www.cygnus.ac.jp/subject/food/news/20120604001211.html

幼児教育保育学科お知らせ（2012年６月６日）

幼児教育保育学科も「第16回　因幡の手づくりまつり」に参加しました！

5月27日（日）、鳥取市の智頭街道商店街で開催された「第16回　因幡の手づくりまつり」に、幼児教育保育学科の2年生11名が学生スタッフとして参加しました。

因幡の手づくりまつりは、子どもたちにものづくりの体験を提供する、日本最大級のイベントです。保育者をめざす本学科の学生にとって、このイベントは子どもの発達課題を意識し、これまで学内で学習してきたことを地域を舞台に応用して行く意味で、非常に貴重な機会となっています。今回参加した本学科の学生は、1年次に専門教育科目「保育・教育入門」でこのイベントの意義を知り、これまでの各授業科目での学びを横断的に捉える視点を、イベントスタッフとして関わる中で高めてきました。

「マジックスクリーン」という工作を提供する講座を担当した学生は、当日までの1ヶ月の準備期間に、何度も試作を繰り返して子どもがどのように楽しんで作れるかを検討しました。子どもが紙を切るには、組み立てるには、どんな絵を描くかなど、子どもの発達段階を意識してどのような工夫が必要かなどを考えてきました。

また、会場となる商店街の画材店が講師となる講座に関わった学生は、鳥取大学の学生とともに商店街に足を運び、試作を重ねてきました。他にも、鳥取大学の大学院生が講師を務める講座に関わった学生は、休日や放課後に鳥取大学に出向き、同じく試作を行ってきました。

当日は約1300人の参加者があり、開始から終了まで、ものづくりに没頭する子どもたちの姿が見られました。いずれの講座も目安の製作時間は設定されましたが、時間をかけて納得いくまで製作する子どもを、どの学生たちもあたたかく見守るとともに、適切なアドバイスを行いながら関わっていました。決して、大人の都合で子どもの動きを制限することなく、作品の完成に期待を抱きトコトン熱中する子どもの姿から、保育者をめざす学生たちはこのイベントの意義を再確認していたようです。

http://www.cygnus.ac.jp/subject/child/news/20120606001213.html

注）各記事には当日の写真がつけられているが、本資料では記事本文のみとした。